

## 2020年5月3日 復活節第四主日・要約

(ヨハネ 10:1～10)

司教 ミカエル松浦悟郎

今日の福音は、イエスが語る「羊と羊飼い」のたとえ話です。この羊と羊飼いの例えは、他の個所では、マタイ(18:12～14)とルカ(15:1～7)に迷った一匹の羊を探しに行く羊飼いの話として出てきます。これらを合わせて考えてみたいと思います。

ところで、羊と羊飼いの関係は、日本にいる私たちにとってはあまりピンときませんが、当時のユダヤ地方ではすぐ分かる話だったことでしょう。「羊はその(羊飼い)の声を聞き分けるとあります。また、羊はその声を知っているのについて行くと書かれており、羊と羊飼いの家族のような深いつながりを感じます。

私が神学生の時、神学校にスペイン、バスク地方出身のアギレさんという修道士さんがいました。彼は羊飼いだっただけで、次のような話をしてくれました。ある日、彼は自分の羊が一匹いなくなったことに気がつき探しに行くことにしました。時間をかけて準備をしたそうですが、それは何日もかかると分かっていたからです。そして、探しに行ってから数日後、丘の上で休んでいると、下の方を羊の群れが通っていくのが見えました。彼はそれを見ていましたが、突然、立ち上がってピーと口笛を鳴らしたのです。その群れの中の一匹が自分の羊であることが分かったのです。すると、羊の群れの中の一匹が、突然首をあげて見渡し、その口笛の主を探したというのです。そして、アギレさんを見つけると、何と、その群れから離れて走って駆け寄ってきたのです。

驚くべきつながりでした。羊は羊飼いの「声を聞き分けられた」のは、その声を「知っている」からなのです。羊飼いが羊一匹一匹を限りなく愛し、羊もそのような羊飼いを心から信頼してついて行っているから分かったのです。イエスと私たちはそのような関係にあるなら何とすばらしいことでしょうか。今日の福音の続きの個所では、「良い羊飼いは羊のために命を捨てる」と書かれています。少なくとも、羊飼いであるイエスは私たちのために命を捨てるほど愛してくれているのです。

問題は、私たちの方が心から信頼し、その羊飼いの声を聞き分けることができるかどうかです。私たちは、毎日の生活の中で、様々なものを見、また、無数の音、声を聞いています。しかし、その多くは、自分の思い、価値観で選択して選んでいるのであって、真の羊飼いの呼び声に開かれていないことが多いのです。

では、私たちは真の羊飼いの声、すなわちイエスの呼び声を聴くとは具体的にどういうことか、少し考えてみたいと思います。

ふつう、私たちが神の声を聴こうとすると、神さまに「どうぞ、お話下さい」という開かれた心で祈ったり、日常生活を過ごしたりします。その中で、何らかのしるしや出来事を通して神さまからの語りかけを受けとめようとしています。

それとは別の形で神さまからの声を聴くことがあるということ、今日の福音からお話したいと思

います。

このアギレさんの話につながるイエスのたとえ話は、羊と羊飼いの深い関係についてでした。これらには直接書かれていないことで、私にとっては昔からもう一つの関心事がありました。それは、羊飼いが一匹を探しに行くとき、残された 99 匹の羊はどうしているのか、言い換えると、残された羊たちは、迷った羊のことをどう受け止めていたかということです。もし、残された羊たちが迷った羊に無関心なら、羊飼いが自分たちを置いて行ってしまったことに不満を持ったことでしょう。しかし、99 匹が迷った羊のことを羊飼いと同じように無事に戻ってきてほしいと心から思っていたら、探しに行く羊飼いと同じ気持ちで待っていたと思います。このことから、羊飼いと迷った一匹の関係だけでなく、残された 99 匹と迷った一匹の関係がとても重要なのです。

今、コロナの問題では同じような例が多く見られます。例えば、ある地域で感染者が出た。ある家庭のお父さんとします。そのような場合、周りの人たちの対応には2つあるでしょう。ある地域では、自分たちが感染したら困るので、その家族を遠ざけ、差別し、追い出そうとする。一方別の地域では、周りの人が「お父さんを隔離しなければいけなくなったら、いろいろ大変でしょう」と子どもの世話や食べ物を持って来るなど皆でサポートする。もちろん、牧者であるイエスは苦しみにあるその家庭のところに駆け寄ってきて守ろうとしています。その時、彼らを支えようとする地域の人たちはその牧者の心を自分たちの心として感じているのです。言い換えれば、牧者の声を心のどこかですでに聴いているのです。

この世界には、宗教の有無にかかわらず、苦しむ人たちに駆け寄る人たちは多くいます。かれらは皆、苦しむ人の声に動かされて駆け寄っていますが、それは真っ先に駆け寄っているイエスの思いを共有していることでもあるのです。神の声を聴くということは、具体的には人との関わりの中から感じる思いに心を開くということです。

今日の福音で使われた「聞き分ける」という言葉には、「従う」という意味が入っています。先ほどの例のように、人間として心の深いところで共に生きたいと願い、共感する心があれば、「すべきだから」というより、駆け寄らずにはいられない思いで動かされることでしょう。それが、イエスの声に聴き従うことなのです。

アギレさんの羊は、彼の声聞いて喜んで駆け寄ってきました。その羊のように、一人一人を愛して駆け寄るイエスと一緒に私たちも駆け寄りたいものです。そこには、手を広げて待っている羊飼いがいるからです。